

異本処理システムによる道元禅師関係文献の書誌学的研究（序）

——真字『正法眼蔵』による試み

角 田 泰 隆

一 はじめに

道元禅師関係文献は、鎌倉期の文献としては、比類無き多くの写本が存在し、その謄写は信仰的な立場から忠実に行われてきている。とはいえ、当然のことながら書写・伝播の過程で細部において若干異なる異本が存在しており、これまで、手作業による異本間の校異作業が行われ、その原姿の様相の解明や伝播系統についての研究が行われてきた。しかし、その作業は研究者の視覚による対照作業であり見落としもあることがあり、また煩雑な作業であるため、一部の代表的文献について行われているに過ぎなかった。

本研究は、平成十三年度駒澤大学特別研究助成金（共同研究）による研究であり、コンピュータを活用し「異本処理システム」を利用して、これら諸本の系統分類を試み、それによって道元禅師関係文献の書誌学的研究に新たな可能性を見出そうとしたものである。「異本処理システム」は、本研究の共同研究者である駒澤短期大学の石井公成教授が開発に関わっているもので、これを用いた研究は道元禅師関係文献については初めての試みとなる。筆者は、これによって書写・伝播系統の推測も可能であり、道元禅師の名著『正法眼蔵』において撰述示衆年月日が不明な巻については、他の明確な巻との表現方法の対照などによって、ある程度の撰述時期が推測できるかも知れないと考えた。また、再治（書き改め）が行われている巻で草案本か再治本か不明なものについては、他の巻との表現等の比較からある程度の先後の特定が可能

となり、再治がどのように、なぜ行われたのか、その意図を明らかにすることもできないのではないかと期待したのである。

まず道元禪師の代表的な著作である『正法眼蔵』について試みよう、本山版『正法眼蔵』（九十五巻本）はじめ、乾坤院本（七十五巻本）・洞雲寺本（六十巻本）・永光寺本（十二巻本）・秘密『正法眼蔵』（二十八巻本）はじめ『正法眼蔵』諸本の電子テキストをそれぞれ完成させ、そのうち「異本処理システム」を用いて様々な処理を行おうと考えた。

『正法眼蔵』の電子テキスト入力には、既に一部のテキストによって行われていた。そして、そのテキストと異本との比較・校異作業が行われ、頭注・脚注、あるいは末尾にそれが示されるといふものであった。しかも、細部において省略されている部分もあった。しかし、本研究においては、諸本をそれぞれ完成させる必要がある、まず、これらの成果を大いに参照し、原本を参照しながら、それぞれの異本テキストを個々にコンピュータ入力を行わなければならない。膨大な量のテキストでもあり、いくつかの異本もあり、与えられた一年の研究期間では、テキストのコンピュータ入力もその半分ほどを入力できたに過ぎず、その分析を行うまでには到底至らなかった。

当然のことであるが、正確な分析結果を出すためには、テキストの正確な入力が必要である。そのために、作業は予想以上の困難を窮めた。写本には、多くの難字・異体字等が存在し、これらを完璧に忠実に電子テキスト化することは不可能であることは予知していたものの、そして完璧なまでの精密さが本研究にとって必ずしも必要不可欠なことではないと考えてはいたものの、どこまで正確さを求めるべきか、それが現実的にどこまで可能かということが問題となり、試行錯誤の中で、作業は予定通りには進まなかった。現在も継続作業中であるが、これが完成すれば、確実に、細部にわたって異本に関する研究を行うことができるかもしれない。

そこで、『正法眼蔵』は今後の継続作業とし、本論では、河村孝道博士によって近年いくつかの古写本が発見・紹介されている真字『正法眼蔵』に着目し、これを取り上げて、この「異本処理システム」を用いた書誌学的研究の試験的研究を

行ってみることにした。真字『正法眼蔵』は、分量も適当であり、文体も漢文体であるため、分析処理が比較的容易に行われるのではないかと考えられたからである。但し、それにしても、十分な研究期間が得られなかったため、まだ不完全なものであることは否めない。

二 真字『正法眼蔵』の書誌学的研究について

真字『正法眼蔵』は、和語で書かれたいわゆる『正法眼蔵』（仮字『正法眼蔵』とも）に対し、漢文体の古則三百則の撰集であり『正法眼蔵』と安題されていることから真字『正法眼蔵』（『正法眼蔵三百則』とも）と名称されている。

この真字『正法眼蔵』については、河村孝道著『正法眼蔵の成立史的研究』（昭和六二年二月、春秋社刊。前篇第二章「真字『正法眼蔵』の書誌学的考察」、八二～三五六頁。以下、本書を『河村本』と略称する）に詳しいが、以下、この文献の発見・紹介を中心に概説しておく。真字『正法眼蔵』の存在は、懷辨による『正法眼蔵』「八大人覺」巻末の識語によって予測されていたものの、限られた人々によって転写され、秘蔵されていたに過ぎなかった。それが江戸期になって宗統復古運動の展開の中で面山瑞方（一六八三～一七六九）によって紹介され、実際に世上に知られるに至ったのは、この真字『正法眼蔵』の三百則に指月慧印（一六八九～一七六四）が拈評を加えたものが、瞎道本光（一七一〇～一七七三）によって『拈評三百則不能語』と表題されて明和三年（一七六六）に上梓されたからのことである。しかし、この真字『正法眼蔵』がはたして道元禪師の親撰であるのかどうかについては疑問視されていた。

ところが、近年になって神奈川県金沢文庫（称名寺委託本）から弘安十年（一二八七）点了（後述）の記録がある古写本真字『正法眼蔵』の一部（中巻）が発見・紹介され、真字『正法眼蔵』三百則が道元禪師の親撰であることがほぼ証明されるに至った。ただし、これは中巻のみの零本であり、本文に欠丁もあり、先の『拈評三百則不能語』の本文とも少なからず相違がみられ、三百則の完全書写本の発見が望まれていた。

異本処理システムによる道元禪師関係文献の書誌学的研究(序) — 真字『正法眼蔵』による試み(角田)

それが近年、河村博士によって数種の古写本が相次いで発見・紹介され、道元禪師の親撰であることが確認されるとともに、その全容が明らかとなり、道元禪師撰集の原姿にせまるその様相を見ることができると至ったのである¹⁾。

ここに真字『正法眼蔵』の諸種古写本の発見を中心に概説してみたが、その撰述意図、あるいは撰述意義等の問題はさておき、その書誌学的研究においては、資料調査・発見・紹介およびその資料の詳細な研究において河村博士の研究がその全てであると言っても過言ではない。

河村博士の真字『正法眼蔵』に関する研究(前述『河村本』八二―三五六頁)では、その諸本対照校異が、以下述べる『真法寺旧蔵本』を底本として『金沢文庫本』『永昌院本』『成高寺本』『丈六寺本』『拈評本』の五本と本文校合されて示されており、その校異を通して真字『正法眼蔵』(以下、『三百則』と略す)の各書写本の内容的特徴・写本巻の関連性が考察され、各書写本の系統的位置づけが推論されている。本稿は、これらの研究を傍証すべく、「異本処理システム」を用いての分析を試みたものであるが、以下、『河村本』によりながら、本稿で取り上げた諸種古写本の形態について概説しておきたい。

三 諸種古写本『三百則』の形態

金沢文庫所蔵『正法眼蔵中』(中巻一冊)

昭和九年、大屋徳城編『金沢遺文』に金沢文庫所蔵の『正法眼蔵中』(『金沢文庫本』と略す)が紹介され、それが『三百則』の一部(中巻)であることが明らかとなり、その後の研究で、『三百則』が道元禪師の真撰であることが河村孝道博士をはじめ多くの学者によって認められた。河村博士によれば、この『金沢文庫本』は、『三百則』の草稿本的原初形態を示すものであり、後に他本によって添註附記や私註が施点されていったのもであるとされる²⁾。この加点が何時の時点で誰によって行われたのか定かではないが、末尾奥書に「弘安十年十一月十八日点了」とあり、この「点了」を、河

村博士の説のように、朱筆加點作業が終わったことを示すものであり、しかも同一人の筆蹟であるとすれば、現存する最古の『三百則』の写本であると言える。また、本書に付された訓読は、仮字『正法眼藏』と比較して見たとき、多くの共通点が見出され、注目される。

『拈評三百則不能語』(三卷)

指月慧印(一六八九―一七六四)が『三百則』の各則に拈評を加えたもので、本書が上梓されるに至った縁由は『河村本』に詳しい。⁽⁴⁾明和四年に法嗣瞎道本光(一七一〇―一七七三)が後序を付して刊行している。その後序に、「老人效採華之蜂、於拈古或所約文」とあるように、採華の蜂に效つて古則の宗意を明らかにすることを主として、古則本文を自由に約文したことが知られる。つまり、この『拈評三百則不能語』(『拈評本』と略す)に見られる『三百則』本文は指月によって取捨約文し操作されたものであり、原形(本来相)を忠実に伝えるものではない。

真法寺旧藏本(二・三卷一冊)

河村博士が発見・紹介された。扉紙に本文の書体とは異なる筆跡で「真法什物 東華押」とあり、末尾欄外に「黄川様之三百則啓」と書かれており、「黄川」(不詳)なるものが所持し、後に真法寺に什物として納められたものと考えられている。河村博士によれば、この『正法眼藏三百則』(『真法寺旧藏本』と略す)は、昭和三二年、東京本郷・柏林社古書店より出て、宮城県故伊勢修成氏が入手所持されていた古写本であり、よつて、黄川所持本であったことから「黄川本」とも「伊勢氏旧藏本」とも呼称できるもので、扉紙に書かれている「真法什物」の「真法」とは、長野県上高井郡高山村の万松山真法寺を指すものであると考えられ、「東華押」の東なる人物は真法寺二十四世東秀泰嶽(安政三年・一八五六寂)を指すものとされる。また、河村博士によれば、書写年については、古書店目録の年代推定は「慶長元和頃」として

出品されていたものであるが、専門的な書誌学的鑑定からして何時頃の時代のものかを、川瀬一馬博士に鑑て頂いた所では、室町末期を下ることはないとの鑑定であったという(『河村本』一一一〜一二三頁)。「金沢文庫本」に次ぐ第二の古写本である。しかも、『金沢文庫本』が中間のみの零本であるのに対し、この『真法寺旧蔵本』は上中下巻の完全本であり、史料的価値は大きい。

永昌院所蔵本(三卷一冊)

河村博士が発見・紹介された室町期の古写本である。上巻末尾に「越後国住人 道吉」の署名があり、道吉(不詳)なる人物によって書写されたことが知られる。この『正法眼蔵三百則』(『永昌院本』と略す)が永昌院へ所蔵された経緯は明らかでないが、河村博士によれば(河村本一一三〜一一四頁)、同院第十四世一蓋英周が記録した『校割牒』に、第十世雲国源石(寛永十六年・一六三九寂)の代に入蔵された記録があるという。いずれにしても室町末期の書写本であると思われる、先の『真法寺旧蔵本』と同等に重要な資料である。

成高寺所蔵本(六卷一冊)

昭和四十八年に、河村博士が発見蒐集し、紹介されたもので『永平正法眼蔵蒐書大成』第一卷(昭和五十一年、大修館書店刊)にその影印が収録されている。この『正法眼蔵三百則』(『成高寺本』と略す)は栃木県成高寺に所蔵されている古写本で、表紙には「永平正法眼蔵 附録」と書かれ、仮字「正法眼蔵」(二冊)、「生死」「仏道」「深信因果」「四禅比丘」を収載)と同一の筐に納められている。「正法眼蔵序」の後に識語があり、

此の三百則の公案は、如来の正法眼蔵、祖師の閑家具なり。元祖の法眼、扱ぶを以て揀扱する者なり。その来ること久し。通幻禪師の葬記に云く「三百則は三冊にして通幻禪師の御真筆なり。然る則んば、後人の製作するにあらず。

元祖の親撰なること明かなり（原漢文）

とある。また、第六巻の巻末識語に、

于時文明十三年丑歲二月初五日、濃州他田郡^{（他カ）}脛長法幢於侍者寮書之、從文明十三年至正徳五年二百三十五年也、
徳五乙未年晩秋日

とある。これによれば『成高寺本』は、文明十三年（一四八一）二月五日に、美濃国（岐阜県）脛永^{（はぎなが）}（揖斐郡揖斐川町）の法幢寺侍者寮において書写された写本を、その二三年後の正徳五年（一七一五）に書写したものである。

丈六寺所蔵本（上巻一冊）

やはり河村博士が発見・紹介されたもので、『拈評本』上巻の草稿本であると考えられている。また、この丈六寺所蔵本（『丈六寺本』と略す）は『拈評本』の前段階的作業としての草稿本であり、それも瞎道本光による草稿本の謄写であることが知られ、『拈評本』の成立過程を知る資料としても重要な資料である。^{（5）}（『河村本』一一七―一一八頁）。

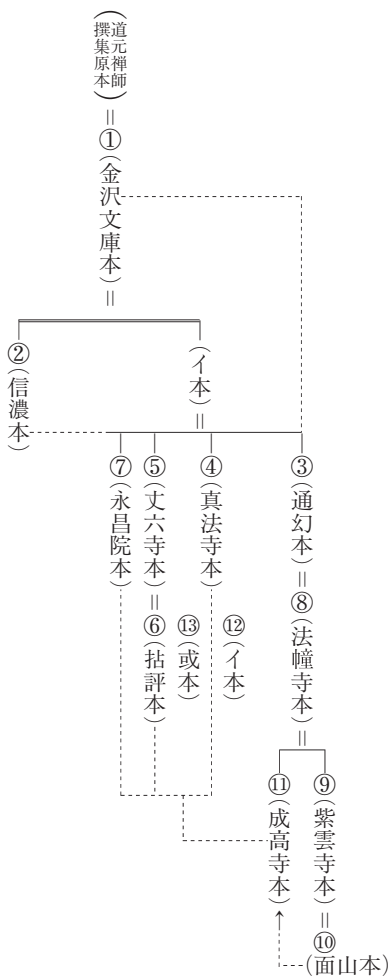
四 河村博士による分析

河村博士は、現在までにその存在が明らかとなっている『三百則』十三種について（これは『河村本』が刊行された昭和六二年の時点で、その後、松源院本と大安寺本が発見されている）、その系統分類を次のように図示されている。

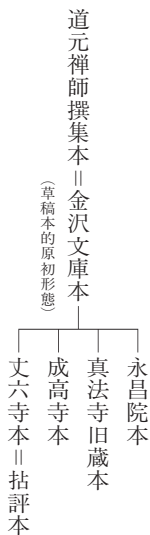
このうち、実際に現存しているものは、①金沢文庫本、④真法寺旧蔵本、⑤丈六寺本、⑥拈評本、⑦永昌院本、⑩成高寺本の六本である。河村博士は、この現存六種本と図の散佚不伝の異本とを含めて内容的に分類して、

共に金沢文庫本に基を発しながら、金沢文庫本の未修訂本の系統と真法寺本（通幻本Ⅱ成高寺本・永昌院本）の大きく二系統に分類されるであろう。信濃本はイ本の中に入るべきものと考えられ、金沢文庫本の古則に住山・人名を補

異本処理システムによる道元禪師関係文献の書誌学的研究（序）―真字『正法眼蔵』による試み（角田）



つて整えたもの。永昌院本の異則は、『三百則』原初本の撰集作業の時点での諸種古則の書き入れ等の草稿撰集本の
 書写に帰因するものと思われ、全体的に真法寺本、成高寺本と類同するものである。〔河村本』二六〇〜二六一頁）
 と述べている。



右の図は、河村博士の分析をもとに現存する古写本のみについて簡単に図示したものであるが、道元禪師の撰集本の草

稿本的原初形態が『金沢文庫本』であり、これが道元禪師によって修訂されて修訂本が成立し、その修訂本の系統を書写伝承したものが『真法寺旧藏本』『永昌院本』『成高寺本』の系統ということになる。そして、この系統の写本により指月が取捨約文したものが『拈評本』であり、その『拈評本』完成に至る前段階的作業の草稿本が『丈六寺本』ということになる。うか。

五 「異本処理システム」による分析結果

ところで、本研究（異本処理システムによる道元禪師関係文献の書誌学的研究）の試論としての本考察は、現存する『三百則』の古写本について、「異本処理システム」による分析を試み、その書写系統を探ったものである。

「異本処理システム」とは、石井教授が仮りに名付けたものであるが、N-gramによる処理、NGSMによる処理、クラスター分析による図示などによって、ある文献の異本間の関係や系統などを探るものである。これらについては、石井公成「仏教学におけるN-gramの活用」（『東京大学東洋文化研究所付属東洋学研究情報センター報』第8号「明日の東洋学」、二〇〇二年一〇月三二日、同センター刊、以下、石井論文と略称）にわかりやすく解説されているが、N-gramとは、情報処理の祖であるクロード・シャノンが開発した確率・統計的自然言語処理の方法であり、テキストを任意の大きさの単位で自動的に分割したのち、特定の文字の組み合わせがどれだけ登場するかを計算し、その結果から様々な情報を引き出そうとするものである（石井論文、二頁）。また、NGSM (N-Gram based System for Multiple document comparison and analysis) は、複数の文献についてN-gramで計算された処理結果をきわめて見やすい形で一覧表示するもので、特定の語句ではなく、複数の文献全体同士を完全に比べ合わせることが可能である。たとえば、AとBの文献に共通する文字列だけをすべて抜き出すとか、AとBとCの文献に共通する文字列をすべて抜き出し、そこからDの文献に含まれる文字列は除く、といった処理が簡単にできる（石井論文、二頁）。このNGSMの処理結果をクラスター分析

異本処理システムによる道元禪師関係文献の書誌学的研究（序）—真字『正法眼藏』による試み（角田）

してその結果を樹形図(樹状図)として表示させることによって、視覚的に各文献の関係や系統が表されるといえるものである。

本考察ではまず『金沢文庫本』(中巻のみ)『真法寺旧蔵本』『丈六寺本』(上巻のみ)『拈評本』『永昌院本』『成高寺本』の六本の古写本を電子テキスト化し、⁶⁾『金沢文庫本』が中巻のみ、『丈六寺本』が上巻のみであったため、分析にあたっては、これを巻ごとに分け、また句点があるものについてはこれを省いて行った。

まず、『金沢文庫本』を除いた「上巻」による分析(クラスター分析による樹状図参照)では、『拈評本』と『丈六寺本』が他本と著しく相違し、『真法寺旧蔵本』『永昌院本』『成高寺本』が近く(以下、類似していることをこのように表現する)、中でも『真法寺旧蔵本』『成高寺本』がより近いという結果が出た。これによれば、『拈評本』と『丈六寺本』が極めて近く、またこの二本とは少し距離をおく『真法寺旧蔵本』『成高寺本』『永昌院本』の三本が近く、この中では『真法寺旧蔵本』と『成高寺本』が極めて近く、『永昌院本』はやや異なっているということになる。

同様に、『丈六寺本』を除いた「中巻」による分析でも、『拈評本』が他本と最も相違し、次いで『金沢文庫本』が相違し、『真法寺旧蔵本』『永昌院本』『成高寺本』の三本は非常に類似しているという分析結果が出た。

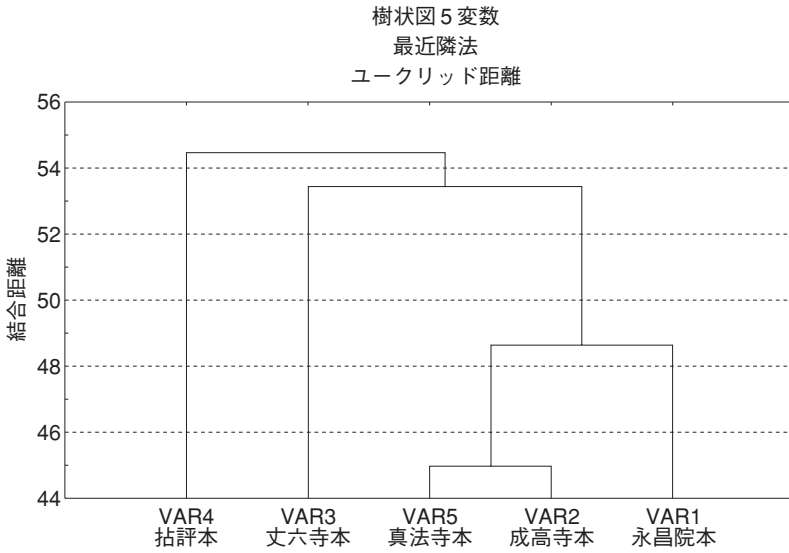
ただ、上巻と中巻による分析では、共通する『真法寺旧蔵本』『永昌院本』『成高寺本』の分析結果において、上巻では『真法寺旧蔵本』と『成高寺本』がより近く、中巻では『真法寺旧蔵本』と『永昌院本』がより近いという矛盾する結果が出た。ここでは樹状図を挙げなかったが、下巻による分析では、上巻とほぼ同様の結果が得られた。つまり、『真法寺旧蔵本』『成高寺本』『永昌院本』の三本のみの比較では、中巻のみが異なった分析結果となったのである。何故このような結果になってしまったのかさらに検討する必要がある。

さて、今回の分析ではこのような結果が出たものの、石井教授が言うように(石井論文、三頁)、研究はここから始まるのである。分析結果を示すだけでは学問ではなく、この上で、処理方法に問題はないかどうか確認したうえで、なぜそ

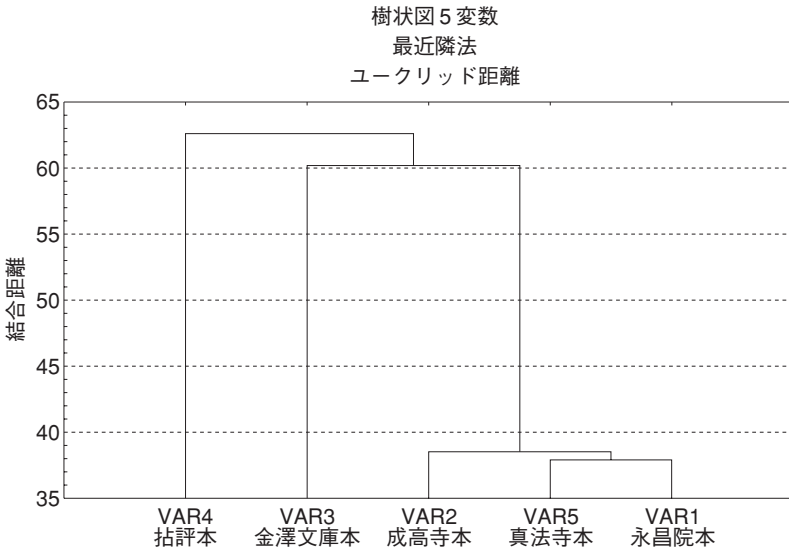
【ラクスター分析による樹状図】

異本処理システムによる道元禅師関係文献の書誌学的研究(序) — 真字『正法眼蔵』による試み(角田)

真字『正法眼蔵』上巻



真字『正法眼蔵』中巻



【真字『正法眼藏』中巻のNGSMによる処理】

(永=永昌院本 成=成高寺本 金=金沢文庫本 拈=拈評本 真=真法寺旧蔵本)

『拈評本』のみ相違する例の一部

一則因縁 (永：0成：0金：0拈：1真：0)
 上堂學前 (永：1成：1金：1拈：0真：1)
 上堂學野 (永：0成：0金：0拈：1真：0)
 不容將軍 (永：0成：0金：0拈：1真：0)
 不就人借 (永：0成：0金：0拈：1真：0)
 不就人別 (永：1成：1金：1拈：0真：1)
 不與麼則 (永：0成：0金：0拈：2真：0)
 不與麼即 (永：2成：2金：2拈：0真：2)
 不通被沙 (永：0成：0金：0拈：1真：0)
 不通被砂 (永：1成：1金：1拈：0真：1)
 人亦退一 (永：0成：0金：0拈：1真：0)
 人亦退忽 (永：1成：1金：1拈：0真：1)
 休靜和尚 (永：0成：0金：0拈：1真：0)
 休靜禪師 (永：1成：1金：1拈：0真：1)
 保老兄未 (永：0成：0金：0拈：1真：0)
 保老兄猶 (永：1成：1金：1拈：0真：1)
 俱捐結侶 (永：1成：1金：1拈：0真：1)
 俱棄結侶 (永：0成：0金：0拈：1真：0)
 免情識山 (永：0成：0金：0拈：1真：0)
 免情識澗 (永：1成：1金：1拈：0真：1)
 入山見仰 (永：0成：0金：0拈：1真：0)
 入山見在 (永：1成：1金：1拈：0真：1)
 八洞山和 (永：0成：0金：0拈：1真：0)
 八洞山悟 (永：1成：1金：1拈：0真：1)
 冷似雪霜 (永：1成：1金：1拈：0真：1)
 冷似霜雪 (永：0成：0金：0拈：1真：0)
 別傳何物 (永：0成：0金：0拈：1真：0)
 別傳箇什 (永：1成：1金：1拈：0真：1)
 唐憲宗帝 (永：0成：0金：0拈：1真：0)
 唐憲宗皇 (永：1成：1金：1拈：0真：1)
 外雪消也 (永：0成：0金：0拈：1真：0)
 外雪銷也 (永：1成：1金：1拈：0真：1)
 汝耳教汝 (永：1成：1金：1拈：1真：0)
 汝耳根教 (永：0成：0金：0拈：0真：1)
 汝耳汝聞 (永：1成：1金：1拈：0真：1)
 汝耳汝聽 (永：0成：0金：0拈：1真：0)
 泉路何處 (永：0成：0金：0拈：1真：0)
 泉路向什 (永：2成：2金：2拈：0真：2)
 泉路向何 (永：0成：0金：0拈：1真：0)
 皆賀獨舡 (永：0成：0金：0拈：1真：0)
 皆賀獨舡 (永：1成：1金：1拈：0真：1)
 祇滯聲聞 (永：1成：1金：1拈：0真：1)
 祇滯聲色 (永：0成：0金：0拈：1真：0)
 與洞山度 (永：0成：0金：0拈：1真：0)
 與洞山渡 (永：1成：1金：1拈：0真：1)
 轉處也不 (永：0成：0金：0拈：1真：0)

轉處也無 (永：1成：1金：1拈：0真：1)
 鼓聲喫飯 (永：0成：0金：0拈：1真：0)
 鼓聲歸喫 (永：1成：1金：1拈：0真：1)
 作什麼沙 (永：0成：0金：0拈：1真：1)
 作什麼砂 (永：1成：1金：1拈：0真：0)

『金沢文庫本』のみ相違する例の一部

一婆子僧 (永：0成：0金：1拈：0真：0)
 一婆子每 (永：1成：1金：0拈：1真：1)
 三麻浴山 (永：0成：0金：1拈：0真：0)
 三麻谷山 (永：1成：1金：0拈：1真：1)
 亦是藏師 (永：1成：1金：0拈：1真：1)
 亦是藏祖 (永：0成：0金：1拈：0真：0)
 來稜又有 (永：0成：0金：1拈：0真：0)
 來稜如是 (永：0成：0金：1拈：0真：0)
 便吹滅師 (永：1成：1金：0拈：1真：1)
 便吹滅於 (永：0成：0金：1拈：0真：0)
 僧問如何 (永：7成：7金：4拈：7真：7)
 吹滅師於 (永：1成：1金：0拈：1真：1)
 吹滅於是 (永：0成：0金：1拈：0真：0)
 朝宣問群 (永：1成：1金：0拈：1真：1)
 朝宣問郡 (永：0成：0金：1拈：0真：0)
 直須勤學 (永：0成：1金：0拈：1真：1)
 直須勸學 (永：1成：0金：1拈：0真：0)
 省十四僧 (永：0成：0金：1拈：0真：0)
 省十四趙 (永：1成：1金：0拈：1真：1)
 草處去師 (永：1成：1金：0拈：1真：1)
 草處立師 (永：0成：0金：1拈：0真：0)

『永昌院本』のみ相違する例の一部

一下仰回 (永：1成：0金：0拈：0真：0)
 一下仰廻 (永：0成：1金：1拈：1真：1)
 也仰却問 (永：1成：0金：0拈：0真：0)
 也仰山却 (永：0成：1金：1拈：1真：1)
 似大師大 (永：0成：1金：1拈：1真：1)
 似大師師 (永：1成：0金：0拈：0真：0)
 僧遂持詣 (永：1成：0金：0拈：0真：0)
 僧遂特詣 (永：0成：1金：1拈：1真：1)
 兄切須勤 (永：0成：1金：1拈：1真：1)
 兄切須坐 (永：1成：0金：0拈：0真：0)
 如此上坐 (永：1成：0金：0拈：0真：0)
 如此上座 (永：0成：1金：1拈：1真：1)
 與三十棒 (永：1成：0金：0拈：0真：0)
 與二十棒 (永：0成：1金：1拈：1真：1)
 藥山弄師 (永：0成：1金：1拈：1真：1)
 藥山弄獅 (永：1成：0金：0拈：0真：0)

異本処理システムによる道元禪師關係文獻の書誌学的研究(序) — 真字『正法眼藏』による試み(角田)

『成高寺本』のみ相違する例の一部

染汚乃不 (永:0成:1金:0拈:0真:0)
 染汚即不 (永:1成:0金:1拈:1真:1)
 業識在十 (永:1成:0金:1拈:1真:1)
 業識性十 (永:0成:1金:0拈:0真:0)
 百靈和尚 (永:1成:0金:1拈:1真:1)
 百靈禪師 (永:0成:1金:0拈:0真:0)
 真人常在 (永:1成:0金:1拈:1真:1)
 真人常有 (永:0成:1金:0拈:0真:0)

『真法寺旧藏本』のみ相違する例の一部

眞真人軀 (永:0成:0金:0拈:0真:1)
 眞真人體 (永:1成:1金:1拈:1真:0)

五本が一一致する例の一部

佛法如何 (永:3成:3金:3拈:3真:3)
 作麼生仰 (永:3成:3金:3拈:3真:3)
 作麼生是 (永:3成:3金:3拈:3真:3)
 來時和尚 (永:2成:2金:2拈:2真:2)
 勘過始得 (永:2成:2金:2拈:2真:2)
 包含萬有 (永:2成:2金:2拈:2真:2)

その他の例

乃敲禪床 (永:1成:0金:1拈:0真:1)
 乃敲禪牀 (永:0成:1金:0拈:1真:0)
 人曰某去 (永:0成:1金:1拈:0真:1)
 人曰某甲 (永:2成:1金:1拈:2真:1)
 仰曰解咲 (永:0成:1金:0拈:0真:0)
 仰曰解笑 (永:1成:0金:1拈:1真:1)
 像光光相 (永:0成:1金:0拈:0真:0)
 像光影相 (永:0成:0金:1拈:1真:1)
 像光明照 (永:1成:0金:0拈:0真:0)
 八九成巖 (永:0成:0金:1拈:0真:0)
 八九成師 (永:2成:1金:0拈:2真:1)
 八九成德 (永:1成:1金:1拈:1真:1)
 八九成時 (永:0成:1金:0拈:0真:1)
 刹竿着七 (永:0成:0金:0拈:1真:0)
 刹竿着阿 (永:0成:1金:1拈:0真:1)
 刹竿着阿 (永:1成:0金:0拈:0真:0)
 南嶽大師 (永:0成:0金:0拈:1真:0)
 南嶽大慧 (永:0成:0金:0拈:1真:0)
 南嶽山大 (永:2成:2金:2拈:0真:2)
 却汝意教 (永:1成:1金:1拈:1真:0)
 却汝意根 (永:1成:1金:0拈:1真:2)
 却汝眼教 (永:1成:1金:1拈:1真:1)
 却汝眼汝 (永:1成:0金:0拈:0真:0)
 却汝耳教 (永:1成:1金:1拈:1真:0)
 却汝耳根 (永:0成:0金:0拈:0真:1)
 及歸師講 (永:1成:1金:0拈:0真:0)
 及歸講肆 (永:0成:0金:1拈:1真:1)

大有人咲 (永:0成:1金:0拈:0真:0)
 大有人疑 (永:1成:1金:1拈:1真:1)
 大有人笑 (永:1成:0金:1拈:1真:1)
 官將行三 (永:1成:1金:1拈:1真:1)
 官或示衆 (永:1成:0金:1拈:1真:1)
 官會二僧 (永:0成:1金:0拈:1真:0)
 官會或示 (永:0成:0金:0拈:0真:1)
 官會有二 (永:1成:0金:1拈:0真:0)
 官會有或 (永:0成:1金:0拈:0真:0)
 寸草處去 (永:1成:1金:0拈:1真:1)
 寸草處立 (永:0成:0金:1拈:0真:0)
 寸草處許 (永:0成:0金:0拈:1真:0)
 寸草處還 (永:1成:1金:1拈:0真:1)
 常在汝等 (永:1成:0金:1拈:0真:1)
 常在汝諸 (永:0成:0金:0拈:1真:0)
 更不擬舉 (永:1成:0金:0拈:0真:0)
 更不疑舉 (永:0成:1金:1拈:1真:1)
 更不疑著 (永:1成:1金:1拈:1真:1)
 木沙曰盡 (永:0成:0金:0拈:1真:1)
 木砂曰盡 (永:1成:1金:1拈:0真:0)
 珍重揭簾 (永:0成:1金:1拈:1真:0)
 珍重揚簾 (永:1成:0金:0拈:0真:1)
 生及歸師 (永:1成:1金:0拈:0真:0)
 生及歸講 (永:0成:0金:1拈:1真:1)
 省前話乃 (永:1成:1金:1拈:1真:1)
 省前話二 (永:1成:1金:0拈:1真:0)
 省前話二 (永:0成:0金:1拈:0真:1)
 称嘆而去 (永:1成:0金:0拈:0真:0)
 称歎去世 (永:0成:0金:0拈:1真:0)
 称讚而去 (永:0成:1金:1拈:0真:1)
 經一歲師 (永:0成:0金:0拈:1真:0)
 經一載師 (永:1成:1金:1拈:0真:1)
 聞鼓聲乃 (永:0成:0金:0拈:1真:0)
 聞鼓聲喫 (永:0成:0金:0拈:1真:0)
 聞鼓聲歸 (永:1成:1金:1拈:0真:1)
 聞鼓鳴乃 (永:1成:1金:1拈:0真:1)
 言下大悟 (永:4成:4金:2拈:2真:4)
 言下得旨 (永:0成:0金:0拈:1真:0)
 言下有省 (永:2成:2金:1拈:3真:2)
 近前來向 (永:1成:1金:1拈:0真:1)
 近前來爲 (永:0成:0金:0拈:2真:0)
 近前來與 (永:1成:1金:1拈:0真:1)
 迸散六斛 (永:1成:1金:0拈:1真:0)
 迸散六解 (永:0成:0金:1拈:0真:1)
 須勤學佛 (永:0成:2金:1拈:2真:1)
 須勸學佛 (永:2成:0金:1拈:0真:0)
 萬像之中 (永:3成:3金:0拈:2真:0)
 萬象之中 (永:1成:1金:1拈:2真:4)
 中独露身 (永:3成:4金:1拈:4真:4)
 之中独露 (永:3成:4金:1拈:4真:4)

異本処理システムによる道元禪師関係文献の書誌学的研究(序) — 真字『正法眼藏』による試み(角田)

のような結果が出るのか、多くの資料を活用しながら徹底的に調べ、テキストそのものをじっくり読み直し、考えてゆくのが研究ということになる。

この分析結果をまとめれば、『拈評本』と『丈六寺本』が極めて近く、これと『真法寺旧藏本』『成高寺本』『永昌院本』の三本はやや距離をおくものであり、かなり近い三本の中でも『真法寺旧藏本』と『成高寺本』がより近く、『永昌院本』はやや異なっている。この分析結果は、先の河村博士の系統分類の図示とほぼ一致するものと見てよい。

ただ、不明であるのは、先に述べたように『真法寺旧藏本』『成高寺本』『永昌院本』の三本の比較において、上・下巻と中巻とで異なった結果が出たことである。三百則の古則本文以外の余分な記述を排除して、もう一度分析して見る必要がある。

また興味深いのは、樹状図では『拈評本』は『真法寺旧藏本』『成高寺本』『永昌院本』の三本よりも『金沢文庫本』に近いという結果が出たことである。この結果からは、『拈評本』が基づいた三百則本文は、『真法寺旧藏本』『成高寺本』『永昌院本』の系統の写本ではなく、『金沢文庫本』あるいはその系統に属する写本であるということとなる。この分析結果は先の河村博士の分析と相違するものであるので、その解明が今後の一課題である。

六 おわりに

本考察は、「異本処理システム」による道元禪師関係文献の書誌学的研究の序説ともいうべきものであり、真字『正法眼藏』によってそれを試みたものである。「異本処理システム」を用いての分析によって、何か新しい成果が出されたわけでもなく、かえって実際とは異なる分析結果が出された部分もあるが、これはこのシステムの設計によるものであって、これに、より正確な情報と、これまでの研究成果を加味してゆけば、かなり正確な分析結果が導き出されると筆者には考えられる。

筆者の研究は、道元禪師の思想研究にあり、その文献を全体的に見渡しながら、かつその一節一節に示された思想を深く掘り下げることにある。しかしその一方で、その基礎的研究として、文献の書誌学的研究も必要であることはあらためて言うまでもない。書誌学的研究は実に骨の折れる研究であり、道元禪師の書誌学的研究に大きな成果を残してきた河村博士の調査・研究には、本考察を行なうにあたって多大な恩恵を受けた。博士は、ころあるものによって、今後この分野での調査・研究が継続して行われてゆくことを期待しておられるが、その期待に応えて地道な調査研究を行ってゆくとともに、すでに博士によって発見・紹介され、さらには影印・翻刻され上梓された幾多の文献についても、大いにこれを活用して、さらに一步でも研究を前進させていかなければならない。

この「異本処理システム」による研究は、その研究のための一方法に過ぎないが、大いに活用すべき方法であることは間違いない。今後さらにその処理方法を含めた研究を重ね、この分野での書誌学的研究に資することができればと思う。それにしても、異本処理を行うための基礎作業としての、文献の電子テキスト化の作業には多くの労苦と時間が必要である。『正法眼蔵』の諸本の独立した電子テキストの作成・完成には、まだまだ時間がかかりそうである。

註

(1) この『三百則』研究の基礎的必須要件として、道元禪師が撰集された原姿の『三百則』のテキストの復元化ということがさらに望まれていることは河村博士が次に示すとおりである。

真字『正法眼蔵』研究の基礎的必須要件は、金沢本「中巻」を補完することによる真字『正法眼蔵』上中下三巻全巻の確かなるテキストの復元化ということである。金沢本（中巻・本文三葉半欠落）の発見以前は、指月慧印拈評本『拈評三百則』（上中下三巻）のみで、江戸期より道元禪師撰とすることへの真偽相半ばしていたが、金沢本（中巻）の発見により、その真撰が明証されたものの、そのことが直ちに拈評本を以って真字『正法眼蔵三百則』の確定本とはなし難い。拈評本は指月慧印によ

異本処理システムによる道元禪師関係文献の書誌学的研究（序）―真字『正法眼蔵』による試み（角田）

異本処理システムによる道元禪師関係文献の書誌学的研究(序) — 真字『正法眼蔵』による試み(角田)

って古則本文を挙古拈評するに当たっては、自由に古則本文の取捨約文が施された為に、金沢本との本文の相異のみならず、依然として三百箇則本文原姿の全容は、明らかではなかった。その事から、真字『正法眼蔵』の全古則の実相の解明及び拈評本古則本文との関係を明かすため、真字本古写資料の探索は、最も緊急を要する基本的研究の作業であった。筆者は幸いにして、採訪探索・発見の法縁を得て、真字『正法眼蔵』六種の発見・紹介を通して、聊かなりとも真字本の原姿の全容を明かすと共に、金沢本の副次的復元化、及び各本の本文交異による伝写系統の異同を指摘し、拈評本の実相をも明かし得ることができたが、真字『正法眼蔵』テキスト解明への、基本的な手掛りの一端は示し得たと思っている。但し、前に述べる如く、是等の諸種古写本と、真字『正法眼蔵』の撰述原典の実相を伝える金沢本との古則本文の相異の問題、金沢本を道元禪師の最終的撰集本と決定しうるか(仮字本その他の撰述書の修訂推敲の実際よりみて)、を含めての真字本撰集の動機、成立の諸様相、仮字『正法眼蔵』等の撰述書との関り、各古則の引用出典確証の問題等、精査・解明すべき多くの問題を残してはいる。(河村孝道「諸本校異真字『正法眼蔵』」、『道元禪師研究論集』平成一四年八月、大本山永平寺刊、八三二頁)

(2) 本稿は、ここに河村博士が述べられる問題について、なんら応えられないものではなく、かえって河村博士の研究を借りて、「異本処理システム」の有効性を確かめる試みであったともいえる。

その後、近時刊行された『道元禪師研究論集』(平成一四年八月、大本山永平寺刊)に、河村博士は新たに「諸本校異真字『正法眼蔵』」を発表されている。ここでは、これら六本の古写本に『松源院本』と『大安寺本』(下巻のみ)を加え、より緻密な対照校異が行われているが、本稿ではこれら二本を加えて考察する時間的余裕がなかったため、これ以前の研究に基づいている。今後、この成果を含めて、再び分析を行う必要がある。

(3) 「金沢文庫本第五一・第五二則には「信濃本」、第六十九則には「イ本」の註記があり、異本との校合が行われたことを知り得る。さらにまた異本との校異に依ったかと思われる添註附記が第十三・第三一・第四四・第五六・第八五・第八七・第九七則の七箇処に亘って見られる。これは多分に金沢文庫本の如き形態・内容のものが真字『正法眼蔵』の草稿本の原初形態としてあり、後に他本により添註附記や私註が施点されていったものであろう。極論すれば、道元禪師撰集の時点の生まなましさを伝えているのが本書の金沢文庫本『正法眼蔵』ではないかと思われる。」(河村孝道『正法眼蔵の成立史的研究』、昭和六二年二月、春秋社刊、一〇四頁)

(4) 「指月は川崎(神奈川県)海栄山養光寺(明治五年に本寺宗三寺に合併されて廃寺)に在りながら、江戸梅檀林において諸多の学人に祖録や『正法眼蔵』を講じ、或いは諸方の講席に赴いて演法しており、その講筵に列し指月に隨身した者は非常に多い。『拈評三百則不能語』が上梓されるに至った縁由をみるに、曾て指月に参じた旧徒、勢州(三重県松阪)養泉寺十一世孝存

梅友(天明七年・一七八七寂)の発願に依ったもので、それは恐らく指月に参学し、その演法を通して面山の『闢邪訣』中に挙げられる『三百則』の事を聞いていたものと思われる。後に養泉寺に董住するに及んで、同寺に所蔵されていた写本『三百則』三冊の存在を知り、梅友の徒で指月の侍者でもあった顕孝(上野州新生村・永林寺住職)をして、この写本『三百則』の評註を指月に請わしめたものであった。(『河村本』八五頁)

(5) 河村博士は、この上巻第十二則の比較(『拈評本』と『丈六寺本』との比較)から、『丈六寺本』は、『拈評本』の本文において指月が約文したものを本光が補正したものであることを明らかにしている。

(6) 資料の入力にあたっては、資料に忠実に「今昔文字鏡」なるソフトを用いて難漢字を入力したが、分析にあたっては、便宜的にそれらの難漢字はカタカナなどの文字や記号に置き換えて処理した。

(7) 例えばMGSMによる処理では、

將示寂、(永：1 丈：0 成：0 金：0 拈：0 真：0)

將示滅、(永：0 丈：1 成：1 金：0 拈：1 真：0)

という分析が出る。これは『三百則』中巻六七則の冒頭の「臨濟將示寂」の部分の分析結果であるが、『永昌院本』では「示寂」となっており、『丈六寺本』『成高寺本』『拈評本』『真法寺旧藏本』では「示滅」となっていることを示している。ところで『金沢文庫本』が0となっているのは、『金沢文庫本』ではそもそも五七則より六七則までを缺丁により欠くのでこのような結果となっている。このようなことも分析結果に微妙に(『金沢文庫本』が他本と距離をおくという結果となって)影響していつてしまうので、正確な結果を出すためには処理を加えなければならない。

*本文中で触れた石井論文は、その後、インターネット公開された。(http://ricas.ioc.u-tokyo.ac.jp/newsletter.html)

〔本論文は平成十三年度駒澤大学特別研究助成金(共同研究)による研究成果の一部である。〕